

## 付篇2

## 吉田遺跡出土「千字文」音義木簡略報

横山 成己

## はじめに

平成27年度に吉田構内にて実施した動物医療センターリニアック棟新営その他工事(動物医療センター西端部:前室・手術室・覚醒室解体)に伴う立会調査にて、埋没谷の埋土より木簡1点が出土した。本書は平成25年度の調査概報を所収したものであるが、資料の重要性を鑑み略報を掲載する。

## 調査の経緯(図68、写真192～194)

平成26年度の、吉田構内東南端部にて動物医療センターリニアック棟新営その他工事に伴う本発掘調査を実施することとなった。構内空閑地の不足により、当地周辺は平成12年度以降に開発が頻発している状況にあるが、それに伴う既往調査の概略を記すると

平成12年度:総合研究棟新営に伴う発掘調査(田畑2017)

8世紀前半から9世紀中ごろの須恵器を中心に、円面硯を包含する埋没谷を検出。周囲に古代官衙関連遺構が分布する可能性が高まる。

平成14年度:農学部解剖実習棟新営に伴う発掘調査(田畑2004)

埋没谷右岸の緩傾斜地に3棟の総柱建物等を検出。谷埋土より墨書須恵器「官」、銅製蛇尾未製品、銅鉾石、鞆羽口などが出土。鑄造工房関連の官衙が存在した可能性が高まる。

平成18年度:動物医療センター改修Ⅰ期工事に伴う発掘調査(横山2010)

埋没谷右岸の緩傾斜地に柱根の遺存する大型掘立柱建物等を確認(平成18年度)。谷埋土より7世紀後半から8世紀中ごろの須恵器を主体とする多量の土器とともに、木製品が多数出土。少なくとも世紀後半には官衙もしくは首長居館的施設が当地に存在したことが明らかとなる。

平成20年度:動物医療センター改修Ⅲ期工事に伴う発掘調査(横山2012)

埋没谷の左岸を初めて確認。左岸には護岸のための杭・矢板列が設けられており、人為的に谷筋を維持していたことが判明。谷埋土からは8世紀代の須恵器を主体とする土器とともに木製品が多数出土(写真194)。須恵器中に墨書「卅(主)」「主・井」「安」を確認。

この他、本学吉田地区への統合移転時である昭和41年度に実施された吉田遺跡第Ⅱ地区の調査では、埋没谷の南西に隣接する現農学部附属農場牧草地調査区にて、柱穴や溝など古代または中世と見られる多数の遺構を確認したほか、現動物医療センター敷地調査区にて西端部に谷埋土と見られる「遺物包含層ライン」が記録されているが、調査の詳細は定かではない(小野1976・横山2007)。

これら既往の調査により、動物医療センターリニアック棟新営予定地は、埋没谷の検出が確実視されることから、平成26年11月17日から翌27年2月7日にかけて本発掘調査を実施した。

調査の結果、北東端部を除く調査区のほぼ全域が埋没谷であることが判明し、平成20年度調査にて谷左岸が確認されていることから、当地点での谷幅が約12mであることが確認された。谷埋土からは7世紀後半から8世紀代を中心とする夥しい数の土器類が出土しており、未だ整理作業中であるが、墨書土器「□少カ 殿」「田」のほか、鱗状文様の墨書のある土器片も発見されている。

平成20年度調査同様に木製品も多量に出土しているが、谷の最深部にあたる調査区南端部に集中してた(写真193)。木製品に関しては、谷の下流部にて平成14年度に実施した農学部解剖実習棟調査区

や、平成12年度に実施した総合研究棟調査区には顕著な出土を見ていないことから、当調査区周辺の谷右岸部に木製廃棄物を生じさせる工房等の施設が存在したと推定される。

本発掘調査で問題となったのは、動物医療センター西端部に増築されている既設施設（前室・手術室・覚醒室）の存在であった（写真192右上建物）。工事計画では、この施設を解体ののちリニアック棟を建設する予定となっていたが、平成26年度中は施設を講義に使用するため、本発掘調査時に敷地を調査対象とすることができず、平成27年度に工事立会として調査を実施する運びとなった。

### 調査の経過

平成27年度に至り、動物医療センター西端増築施設が撤去された4月22日より、約50㎡（7m×7m）を対象範囲として立会調査に着手した。工事施工業者に依頼し、重機にて造成土を除去したところ、増築施設の基礎は浅く、谷埋土が完全に遺存しており、部分的に上位の遺物包含層も残存していることが明らかとなった。翌23日より資料館員3名（横山・川島・山田）にて人力掘削に着手したが、ゴールデンウィーク明けの5月7日より工事着工というスケジュールを鑑み、3名での完掘は不可能と判断し、翌24日より作業員5名を研究補助員として雇用し、人力掘削を実施した。

27日、谷埋土3上層掘削中に複数の木製品を確認した。木筒状の板製品を取り上げ直後に洗浄したところ、明確に文字が確認されたことから、本学人文学部教授橋本義則氏に実見調査を依頼した。以降も谷埋土掘削を続け、翌28日に掘削を終了し、5月1日に写真撮影・測量等諸記録作業を行い、立会調査を終了した。

### 調査成果（図69、写真195～197）

調査区内において、東から西に走る谷筋を検出した。谷の落ち込みは調査区北東端部よりはじまり、南方に緩やかに傾斜したのち、急勾配で谷底に落ち込んでいる。谷の深さは最深部で約1mを測る。緩傾斜部にピット状の落ち込み2基を確認しているが、埋土は谷埋土2上層と同一である。その他、谷の緩傾斜部、急傾斜部、谷底に杭を検出しているものの、規則性は見出せない。

基本層序は、平成26年度に実施した本発掘調査と完全に一致しており、谷の堆積土は①谷埋土1（黄灰色強粘質土）、②谷埋土2上層（黒褐色弱粘質土）、③谷埋土3下層（黒褐色弱粘質土に礫が多量に混ざる）、④谷埋土3上層（黒褐色泥土）、⑤谷埋土3下層（黒色泥土）、⑥谷埋土4（灰色砂礫）となっている。この内、谷埋土3下層は有機物が密に堆積し、部分的に腐葉土層となっている。谷埋土4は水流堆積層である。

谷埋土に包含されていた資料に関しては、未だ整理作業中であり全貌を把握し得ていないが、谷埋土1および2上下層からは円面硯3点を含む多量の土器片が出土している。谷埋土3上層は本調査区南端部にて多量の木製品を検出した層であり（写真193）、当立会調査においても複数の木製品を確認した。その内の1点が本稿にて報告する「千字文」音義木簡である。

### 木簡調査の経過

4月27日の木簡出土を受け、前述の通り翌28日に橋本氏に実見調査いただき、その後も継続して積読に協力いただくこととなった。5月13日に美祿市長登銅山文化交流館にて赤外線カメラによる調査を実施し、7月28日には奈良文化財研究所都城発掘調査部史料研究室にて渡辺晃宏氏をはじめ室員各氏とともに音義木簡であることを確認し、8月12日に山口大学にて記者発表を行った。

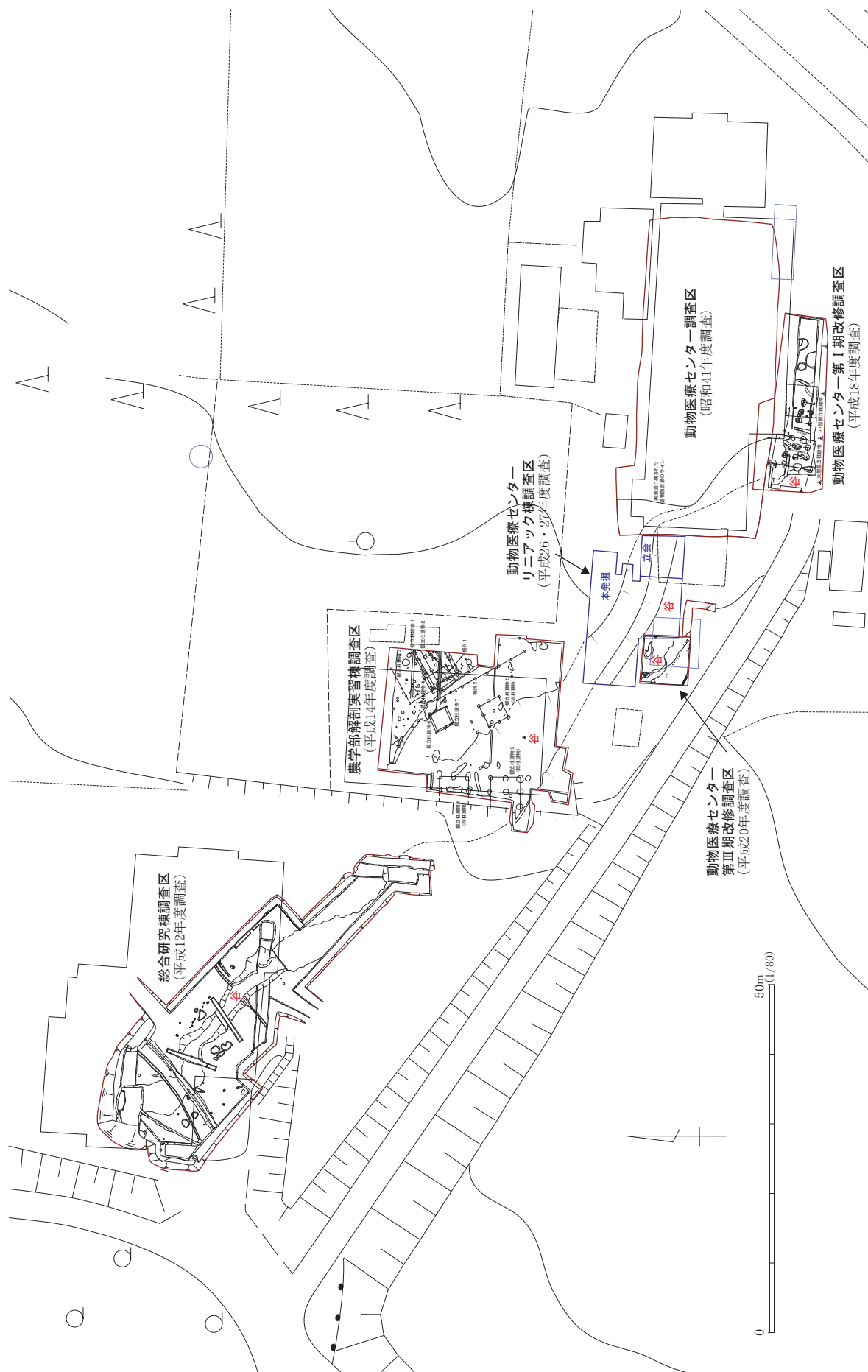
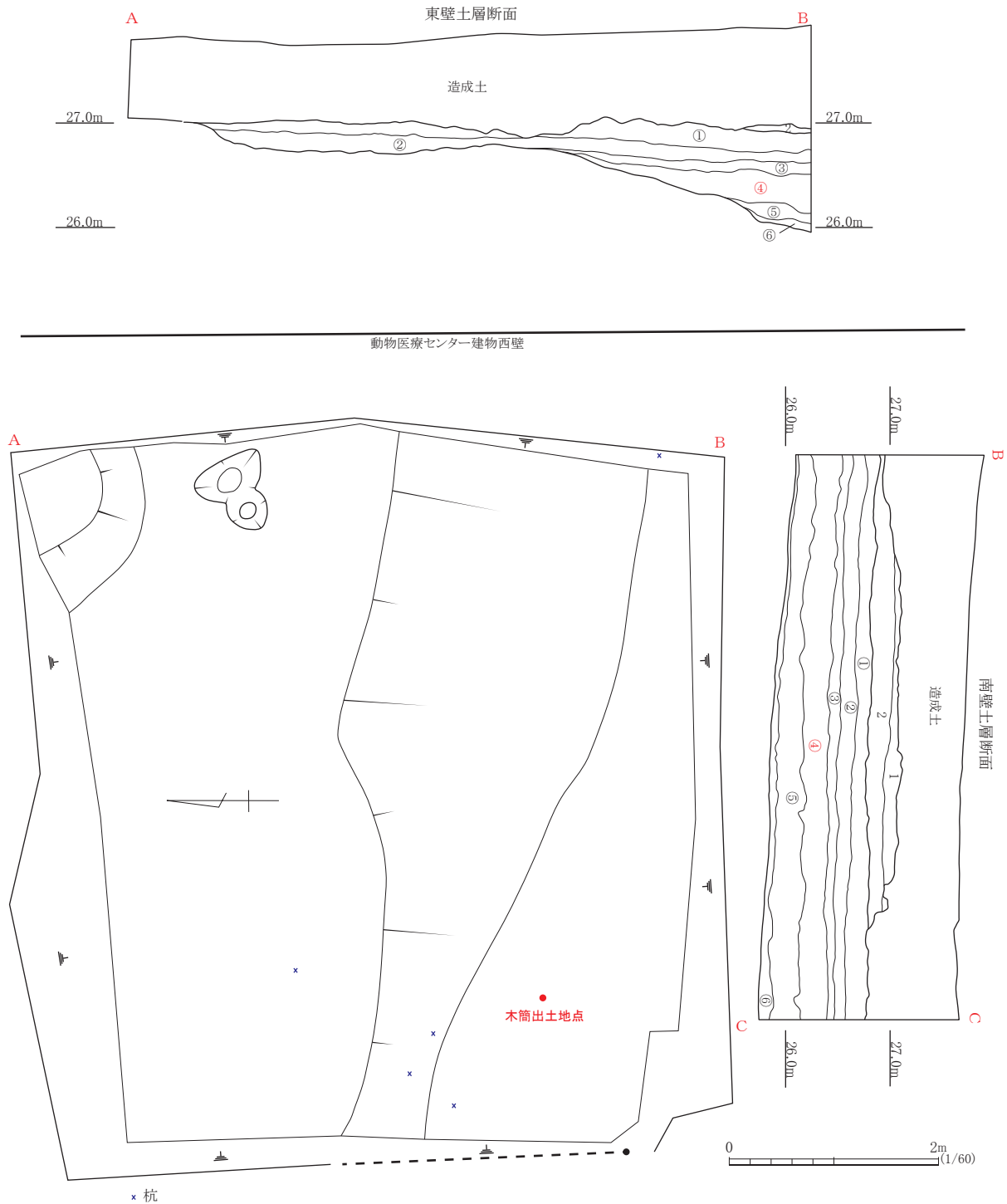


図 68 調査区位置図



- 1：遺物包含層1（黄褐色弱粘質土） 2：包含層2（褐灰色に褐色が混ざる強粘質土）  
 ①谷埋土1（黄灰色強粘質土） ②谷埋土2上層（黒褐色弱粘質土） ③谷埋土2下層（黒褐色弱粘質土に礫が多量に混ざる）  
 ④谷埋土3上層（黒褐色泥土※木簡出土層） ⑤谷埋土3下層（黒色泥土） ⑥谷埋土4（灰色砂礫）

図 69 動物医療センターリニアック棟新営その他工事に伴う立会調査区平面図・断面図





写真 192 本発掘調査区南端部完掘状況 (西から)



写真 193 本発掘調査区南端部木製品出土状況 (南から)



写真 194 平成20年度調査区木製品出土状況 (南西から)



写真 195 平成27年度立会調査区作業着手状況 (南西から)



写真 196 平成27年度立会調査区作業状況 (西から)



写真 197 平成27年度立会調査南壁土層断面 (北から)



その後、12月5・6日に奈良文化財研究所平城宮跡資料館講堂にて開催された木簡学会研究集会にて資料報告を行った際、質疑応答時に参加者より『千字文』の一部である」との指摘を受け、再度橋本、渡辺両氏に検討いただき、未解読の文字も含めてご教示を得た。以下に木簡に関する調査成果を報告する。

### 木簡について(写真198)

木簡は、谷埋土3上層中に複数の木製品とともに発見された。文字面を下に、ほぼ水平の状態出土している。

木簡の上端は折損しており、左右側面と下端は削って整形している。残存長280mm、最大幅37mm、最大厚6mmを測る。樹種はヒノキ科ヒノキ属である。<sup>註1</sup>木簡下部はやや幅が狭まり、表面が荒れているが、これは使用による摩耗と推測される。

文字は片面のみに確認され、釈文は以下の通りである。

1字目	文字：折損	訓：□ [田カ]
2字目	文字：雨	訓：不 路
3字目	文字：露	訓：ツ 由
4字目	文字：□ [結カ]	訓：□ [亡カ] 須 ム
5字目	文字：霜	訓：之 母
6字目	文字：金	訓：□ [久カ] 加 □

2字目「雨」を「フル」と動詞で訓んでいること、本来であれば5字目に入るべき「爲」が欠落することなど、多少の疑問点も残るが、内容から、梁の周興嗣『千字文』第9句から11句にかけての「雲騰致雨 露結爲霜 金生麗水」傍点字に万葉仮名によって訓みを記した音義木簡と見て良いようである。

音義木簡は、これまで飛鳥池遺跡(奈良国立文化財研究所1998)、平城京二条大路跡(奈良国立文化財研究所1995)、北大津遺跡(濱・山本2011)、観音寺遺跡(和田ほか2002)から出土しており、吉田遺跡出土品で5例目となる。前例はいずれも都跡や国営工房跡、国府遺跡であり、地方小官衙からの初例として注目される。また、記された文字の原典が判明した音義木簡としても初例であり、その学術的価値は極めて高い。

なお、木簡に共伴する谷埋土3上層出土土器に関しては、平成26年度実施本発掘調査出土品と合わせ調査中であるが、9世紀に下るものは見当たらないことから、8世紀代を投棄時期と見なしている。

### 謝辞

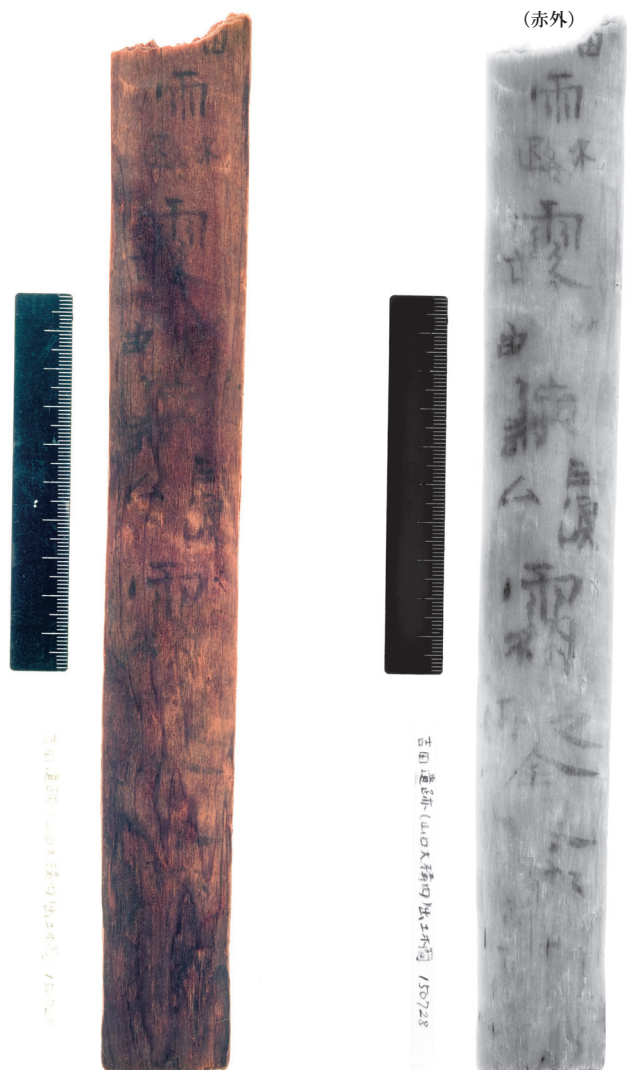
木簡の釈読に当たり、下記の方々にご多大なるご教示、ご協力を賜りました。記して感謝の意を表します。

池田善文 桑田訓也 橋本義則 馬場基 山本崇 渡辺晃宏 (50音順、敬称略)

木簡学会第37回研究集会参加者各位

### 【註】

1) 樹種鑑定は(株)吉田生物研究所に依頼した。



(奈良文化財研究所 中村一郎氏撮影)  
0 5 10cm (1/2)

写真 198 平成 27 年度出土「千字文」音義木簡

积文  
 □ 田カ  
 雨  
 路 不  
 露  
 由 ツ  
 □ 結カ  
 ム □ 亡カ  
 須  
 霜  
 母 之  
 金  
 □ □ 久カ  
 加

【文献】

小野忠熙(1976)『山口大学構内 吉田遺跡発掘調査概報』, 山口大学吉田遺跡調査団(編), 山口  
 田畑直彦(2004)「平成7・10~14年度山口大学構内遺跡の概要」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XVI・XVII』, 山口  
 田畑直彦(2017)「吉田構内総合研究棟新営に伴う発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XX』, 山口  
 奈良国立文化財研究所(1995)『平城宮発掘調査出土木簡概報(三十)二条大路木簡四』, 奈良  
 奈良国立文化財研究所(1998)『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報(十三)』, 奈良  
 濱修・山本崇(2011)「志賀・北大津遺跡」, 木簡学会(編)『木簡研究』第33号, 奈良  
 横山成己(2007)「吉田遺跡第II地区の調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成17年度—』, 山口  
 横山成己(2010)「農学部附属家畜病院改修工事に伴う本発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成18年度—』, 山口  
 横山成己(2012)「農学部附属動物医療センター改修III期工事に伴う本発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成18年度—』, 山口  
 和田萃(2002)『観音寺遺跡I(観音寺遺跡木簡篇)』, 徳島県埋蔵文化財センター(編), 徳島